

創流二十周年記念舞踊会

總
廿五
會

創流二十周年記念舞踊会

榊若人會

題字 前東大寺管長 清水公照

三宅坂 国立劇場大劇場

昭和56年5月23日(土)

開演 午前十一時



御 挨拶

薫風緑樹の候 本日は皆様にはようこそ
お越しくございました

扱て 此度榎若流に於きましては皆々様のお
蔭をもちまして創流二十年の慶事を迎える運
びと相成りました これもひとえに皆々様の
御支援ご声援の恩賜と衷心より厚く厚く御礼
を申し上げます

ご存知のごとく榎若流は過る二十年前私共
が大望を抱き舞踊の道を志ざして創りました
もので日本舞踊の世界ではとても成し遂げる
事の出来る筈のない系類のない文字通りの独
流でございます 然し乍ら此の長い歲月大白
然の苛酷な猛威が荒れ狂う様に舞踊界の異端
児にも耐え努めて芸道一筋に生み生かし育て
た甲斐あって それは北の風が春を運んでく
るかのようになり 大地にしつかりと根をおろし

花は季節を待っていたかのように開花したのでございます。人は勸二郎、勸助のコンビの成せる業と申しますがそのような事はございません。私共を常に暖いお心で叱咤激励下さいました皆様之恩情に支えられての業でございます。人間で申せばやっと成人式を迎えた若い榎若流でございます。梅の木は花が咲いて葉を開くと申します。これよりは私共をはじめとして一門一層の研鑽を常といたしまして枝葉の成長に努め皆々様の御期待に添えます。大樹としてその恩顧に報ゆる所存でございます。年々歳々、皆々様の御後援のもとに盛大に舞踊会を開かせて頂き本日は記念の年にふさわしく一門を卒いて舞踊会の出来ましたことを有難く存じております。又日頃御教導を頂いております諸先生方より身にあまる御祝辞を賜り厚く御礼申し上げます。

何卒、皆々様には終演まで御高覧いただきまして忌憚のない御高批ご声援を賜りますようお願い申し上げます。述べ謹しんで
う創流二十周年の御挨拶を申し述べ謹しんで
お願い申し上げます

昭和五十六年五月二十三日

家元 榎 若 勸二郎

榎 若 勸助

■ 第一部

● 清元 四季三葉草

翁 榎若勸助
千歳 榎若藤之助
三番叟 榎若勸二郎

● 長唄 汐 汲

高橋美登利

● 長唄 新鹿の子

森田江津

● 大和楽 傘に想ふ

あやめ
隅田川

榎若扇駒
榎若紫扇

● 長唄 白酒 売

榎若勸蔵

● 長唄 手習子

榎若史祐

● 長唄 女伊達

お梅 榎若藤之助
男伊達 榎若勸二郎
男伊達 榎若勸助

● 長唄 黒髪

榎若勸雀

● 竹本唄 京鹿子娘道成寺

白拍子花子

榎若勸容

● 大和楽 団十郎娘

娘 榎若扇史郎
丁雅 逸見律子

● 義太夫 蝶の道行

小横 榎若勸澄
助国 榎若勸二郎

■ 第二部

● 長唄 藤娘

榎若勸康

● 長唄 近江のお兼
(晒女)

榎若幸扇

● 長唄 助六

榎若新之助

● 清元 文売り

榎若勸扇

● 長唄 連獅子

狂言師右近後に
親獅子の精
狂言師左近後に
仔獅子の精

榎若勸二郎

榎若勸柳

胡蝶 高橋美登利
高橋由佳理

● 長唄 都風流

榎若勸恵美

● 長唄 大原女

榎若勸以知

● 長唄 四季の山姥

榎若勸喜代

● 竹唄 本
京鹿子娘道成寺

白拍子花子

榎若扇二郎

● 清元 お祭り

頭 榎若勸助

芸者 榎若勸二郎

手古舞 菊池和子

手古舞 穴戸孝子

祝 辞

(玉稿到着順掲載)

さらに奮闘を

舞踊評論家 江 口 博

榎若勸二郎君の榎若流がいつのまにか創流二十周年を迎えた。いつのまにかとは、もうそんな歳月になるかという、うかつな私の驚きの心情を卒直に言いあらわしたままで、二十周年は榎若流の長い未来からすればひとつの節目であるとはいえ、これは流儀を挙げての大きな喜びであるにちがいない。

それにしても榎若流はその二十年間に驚くべき発展をとげた。というのも家元勸二郎君の不退転の努力と、飽くことのない精力的な活躍のおかげだと私は思うが、同時にその家元を助けて榎若流のために、わが身を忘れて粉骨砕身する頭取の勸助君を忘れてはなるまい。この記念舞踊会ではふたりが清元の「お祭り」を踊って有終の美を飾るが、このふたりの名コンビが固く結ばれたまま、しっかりと手を握りあって進むかぎり、榎若流の将来は保証されたようなものである。相共に榎若流のために、舞踊界のために、ふんばってほしいと願うのは私ばかりではあるまい。重ねて二十周年おめでとう。

堂々たる創流二十周年

演劇舞踊評論家 仁 村 美津夫

昨年の四月には、勸二郎さんが第十回記念のリサイタルを行った。そのときのプログラムにも書いたことであるが、彼が六年間に十回のリサイタルを開いたのは舞踊界でもおそらく新記録だったし、そのすさまじいばかりの精進ぶりには驚歎させられた。

そして、本年は創流二十周年をむかえ、その記念公演が盛大に行われるが、この二十年の間に、これも驚異的と思われるほど多数の門下を育成してきた。勸助氏と一体となって、若い家元としての彼が門下の人達への懇切で、愛情のある指導にも挺身していることは公演のたびに多くの門下達が協力し、彼を敬慕し、信頼している姿からも十分に感じられる。

今回は、一部、二部を通じて古典の名作をたくさん並べているが

この二十年の間に榎若流で育った人達が、それらの作品に取り組んで力いっぱい演技で競い立ち、白熱した舞台を見せてくれることも楽しみである。『勇将のもと弱卒なし』の言葉のように、家元勸二郎さんを見習って、榎若流の中から積極果敢な舞踊家が輩出して欲しいものであるし、家元もまた、その点にも心をくばってゆくべきだろう。

二十周年の節目に際して

演劇舞踊評論家 如月青子

お若い榎若勸二郎さんが、はや創流二十周年をお迎えになったこのことに、年少から独立独歩の活動をしてこられたその歩みを思い出しました。いつでしたかお流儀のパーティーで勸二郎さんは参会者に九州から東上された少年の日々の厳しい生活や、踊りへの情熱を自己紹介のように話されたことがありました。さりげない口調の中にどっしりとすわったその根性が窺えて、成程と感じ入りました。戦後の混乱期に育った世代にあって、幼時からただひたすら踊りの為に自己を律してこられた努力が見事だと思えますし、何よりも先ずその目ざした舞踊に天興の才を備えていらっしやることがすばらしいと思えます。その舞台に接する度に私は、芸に対する感度のよさと研究の深さが、一味ちがった厚みとなって迫ってくるのを感じます。創流二十周年記念舞踊会開催という一つの節目に当る今日、更に自重し初心忘るることなく精進して戴きたいと望みます。また、今日ある勸二郎さんの片腕として、彼やお流儀をもり立ててこられた勸助さんの御尽力を讃えると共に、今後ともよりよき舵とりを続けられるよう念じます。

創流二十周年の榎若流

演劇舞踊評論家 萩原雪夫

日本舞踊の世界では新流とされている榎若流が、早くも創流二十周年を迎えて、その記念舞踊会が盛大に催されることになったのは家元・榎若勸二郎さんと、頭取の榎若勸助さんの、二人三脚のように呼吸（いき）の合った踊りへの熱意の賜ものだと思えます。

日本舞踊の世界は歴史の古い流儀が尊とばれているようだけれども、その古きことに執着して新しい道を歩まない舞踊家も多い中で、

新しい流儀を創流し、古典に流儀の個性を生かしている榎若流の存在は、現代に即応した若さがあると思います。いったいに、自分だけが踊って楽しんでいるような踊りが多いようですが、勸二郎さんの踊りは古典に独自の工夫、趣向を加えて、見る人を楽しませるようになっているのが面白く、同じ古典でもひと味ちがった踊りにしているのが特色でしょう。

古典にこだわり、昔ながらの振りに固執しているよりも、現代的といわれても踊りは見て楽しいものの方に惹かれます。創流二十周年を転機として、いつそう流儀の発展に努力されると共に、楽しい、いい踊りを作ってほしいと望んでいます。

榎若勸二郎讃

早稲田大学教授 郡 司 正 勝

まだまだお若く、これからがご活躍とばかり思っておりましたのに、もう創流二十周年記念公演を迎えられたのですか。まったく驚きました。しかし、それだけに、まだまだ前途洋々たるものがあって、頼もしい限りです。ただ肉体芸術の場合は、作品が役に残りませんから振り返えることが許されません。これまでのキャリアもただ記念の道標にするだけでなく、ときによっては、捨ててかかるほどのまた別の新しい創造のための気組に資するものになって貰いたいとおもいます。

この記念舞踊会も、今後の、新しい局面を開くための道標となりますよう、心からお祈り申し上げて、おめでとうをいいます。

“二人三脚で”

舞踊評論家 景 安 正 夫

榎若流創流二十周年記念舞踊会お目出とうございます

因襲的な邦舞の世界にあって、創流ということは、大変なことだったと思います。それをともかくも押し切って、今日まで頑張ってきたことはすばらしいことです。これも家元勸二郎師と、頭取勸助師の強い結びつきがあったからこそでしょう。理想的な二人三脚とあっていいと思います。

十年一昔といえます。現代のようにテンポの早い時代でも、一区切りという意味には変わりありません。それがもう二昔というわけ

で、これは立派な里程標といつていいでしょう。十年ごとの里程標は勲章のようなものです。これからもどんどん増やしていつてほしいと思います。

さて勸二郎師は、なかなか研究熱心な方で、踊りもすこぶる達者です。達者過ぎるといつてもいいでしょう。技術的には申し分ありません。今回勸助師とともに踊られる二曲のうち、「お祭り」は、最も柄に合った踊りと思われれます。いなせでしゃっきりしたいい踊りを期待しています。

勸二郎の偉さ

舞踊評論家 上 林 澄 雄

邦舞新流を創立して、ひろく舞踊界に認められるのは、容易なことではない。榎若勸二郎は若くして、赤手空拳、ゼロの地点から、この至難の道に歩を起し、立派に業なり名をとげるに到った。その創流二十周年を祝つての今日の舞踊会公演にのぞんで、当人の感慨は、過ぎし辛苦の日を想い、今の榎若流の発展を眺め、悲喜こもごもに交錯する、せつないまでに深く複雑なものが、去来しているに違いない。

彼の女方の美しさ、大衆的効果を生む感覚、絶妙な滑稽の創意、そして既成の振付が定まっていな演奏曲の妥当な新作舞のうまさ……など、これまで評者がほめてきた美点である。女方の芸域は、本来は広いものだが、その幅の広さも、勸二郎は着々として体得し再現してきた。現在は男役に新しく挑戦する所かとも考えるが、女方だけをとつても、その芸の深さは、甚大なものがある。一挙になにもかもという総花式は、表面の皮相だけをなでる浅薄な結果に陥りやすいが、それを避けて、もっぱら本来の女方の豊かな世界に傾倒し、その実をあげ、余力あれば他の領域をも手がけてゆくというあせらず、あわてずの着実な芸の研究も、これまた慎重で良心的な芸術家にふさわしい向上法である。このように観察して、ますます勸二郎の偉さに感心させられる。

更 新

田 中 青 滋

創流二十周年ともなればもう新人ではなく、あとへは引けない大ベテラン。見る方でもその目で見ます。

伊勢の太神宮様は二十年目ごとに神殿をお建替になります。建築で二十年はまだまだ充分に使えらる年限であるのにお建替になるのは「つねに新らしく」ということを心掛ける一つの素晴らしい方法です。二十年を限度とした新らしきで「いやつぎつぎに」「悠久に」「宝を伝える神殿は造営されつづけるのです。何万年も保たせようとする石造のギリシャの神殿だって荒廃します。伊勢は二十年目ごとに同じ形で建替るので、流れは悠久です。なんと一番明快な長つづきの方法ではありませんか。

太神宮様を引合いに出してはちと恐れ多いのですが、かくして二十年は心を新らたにし、次の二十年に取かかるべき年です。榎若さんの次の二十年を期待しましょう。

勸二郎さん、勸助さん、おめでとう

芸能学会幹事長 石 井 順 三

榎若流が創流二十周年の記念の舞踊公演を国立大劇場で開催されることを心から御祝い申し上げます。室町京之介さんが、この流の常任顧問的存在であることを、同氏から伺い、何かと意見を求められたのは、創流後何年かたってからのことです。室町さんは、東京商科大学在学中から浪花節など演劇、演芸を研究し、「岸壁の母」などかすかずの新浪曲を発表された方です。二葉百合子さんが、榎若流の会に出演し、この会をもりあげていたのも、なるほどとうなずきました。

家元勸二郎、頭取勸助の名コンビはつとに有名で、その研究熱心が、この日の成果となったことは当然のことでしょう。勸二郎君の芸への執着は恐ろしいほどで、芸だけに生きる人であり、その補佐の勸助君はほどほどの商才を持ち合せていることは、この流の発展を助けているようです。なるほど勸助君は、都立の有名商業校の秀才であったということ、彼の友人からきいております。勸助君が小学校の時、学童疎開した温泉旅館の主人が、私の小学校時代からの親友であることも、なにかの因縁かも知れません。

勸二郎さんが妹の勸柳さんと二十年ぶりで国立の大舞台で「連獅子」を踊られるということをききました。兄妹二人の熱演の舞台が楽しみです。

天才二十年の風雪よ

作 家室 町 京之介

おめでとう榎若流創流二十年。創流とは誕生だ。と思った瞬間私は言葉を改めて——おめでとう天才二十年と叫んでいた。師匠にもつかず、あっちで働き、こっちに勤め、食うや食わずを覚悟して、初めて出て来た東京で、初めて出来た一人の友、頭取榎若勸助と共に舞踊各流の長所を探り、文字通りの独学で、僅か十八才の少年が伝統と因習と排他で彩られた日本舞踊の世界に飛び込んで、敢然日本舞踊榎若流を創流家元になったとは、天才と云はずして他に言葉があるだろうか。然し月日に関りはない。十年たてばひと昔。見果てぬ夢の三十年。天才の辿る二十年の歳月は、人間成長の試練の期間、いや、芸道形成に命をかけ、むごい浮世の雨風に負けるものかと耐え抜いた二つ巴（勸二郎・勸助）の涙かくした星霜だった——。

我が友、南部僑一郎、左本政治、吉川義雄の三君が「東京にこんな素晴らしい踊り手がいたとは知らなかった」と激賞したのは明治座の榎若流の何回目かの会だった——。「僅かの中に斯くも成長したとは驚きだ。傑物だ、近き日必らず名を成すぞ」と嘆声を挙げたのは、日本一の歌舞伎座で開かれた榎若流十五周年記念舞踊会の夜だった。然し、たとえ世間はどうかろうと榎若勸二郎の舞踊活動に止む日はない。マラソン舞踊というか、たった一人で一日四時間ブツ通しで六曲踊ったり、その他国内各会場出演は数え切れない。今や屈指の売れっ子だ。実力とはいえ、ほんとによかった。

おめでとう、天才二十年勸二郎。でも、二十年たってしまった、どうなるのだろうか、大変なのはこれからだ。才能と感覚と抜群の体力にまかせて、片っぱしから踊らないで、ただ万事を大切に、君にくみする叡智をすぐって、計画を練りに練り、夢ゆめ、急ぎはつっしんで、人気者から更に大所を目がけて欲しい。なぜなら——北は東北・北海道、東海道から西は中国・九州まで、今や榎若流の舞踊活動の領域になりつつある現状だ。時来れりと頭取勸助も燃えている。やっと苦勞の甲斐あって二つ巴の時は来たのだ。

おめでとう。天才二十年——天才とは、耐え忍んでこそ真価を表わすものである。もう一度云おう——天才とは、耐え忍んでこそ真価を表わすものである。

出演者



榎 若 勸 助



家 元 榎 若 勸 二 郎



文 売 り
榎 若 勸 扇



四季の山姥
榎 若 勸 喜代



黒 髪
榎 若 勸 雀



白 酒 売
榎 若 勸 蔵



女伊達・四季三葉草(千歳)
榎 若 藤之助



連獅子(仔獅子)
榎 若 勸 柳



都 風 流
榎 若 勸 惠美



助 六
榎 若 新之助



団十郎娘
榎 若 扇史郎



傘に想ふ・隅田川
榎若紫扇



近江のお兼
榎若幸扇



大原女
榎若勸以知



傘に想ふ・あやめ
榎若扇駒



娘道成寺 (第一部)
榎若勸容



蝶の道行・小横
榎 若 勸 澄



娘道成寺 (第二部)
榎 若 扇二郎



手 習 子
榎 若 史 祐



藤 娘
榎 若 勸 康



新鹿の子
森田江津



お祭り・手古舞
菊池和子



お祭り・手古舞
穴戸孝子



団十郎娘・丁雅
逸見律子



胡蝶
高橋由佳理



汐汲・胡蝶
高橋美登利



白坂栄子



山本カネ子



高橋照子



富永栄子



田中嘉子



宇佐見あや子

——娘道成寺・所化——

名披露目



師範昇格
榎 若 扇二郎



師範昇格
榎 若 扇 駒



師範昇格
榎 若 勸 容



師範昇格
榎 若 紫 扇



師範昇格
榎 若 幸 扇



小川幸子こと
榎 若 史 祐



上原利子こと
榎 若 勸 康

番組組

開演 午前十一時

第一部

一、清元 四季三葉草

翁 榎 若 勸 助

千歳 榎 若 藤 之 助

三番叟 榎 若 勸 二 郎

一、長唄 汐 汲

高橋美登利

一、長唄 新鹿の子

森田江津

一、大和楽 榎若勸二郎 構成・振付 傘に想ふ

長田幹彦 作詞
宮川寿朗 作曲
あやめ

榎 若 扇 駒

長田幹彦 作詞
岸上きみ 作曲
隅田川

榎 若 紫 扇

一、長唄 白 酒 売

榎 若 勸 蔵

一、長唄 手 習 子

榎 若 史 祐

一、長唄 女 伊 達

お梅 榎 若 藤 之 助

男伊達 榎 若 勸 二 郎

男伊達 榎 若 勸 助

若い者 市 川 三 男

若い者 中 村 又 雄

一、長唄 黒 髪

榎 若 勸 雀

一、竹本
長唄

京鹿子娘道成寺

白拍子花子

碓 若 勸 容

所化 中村又雄

市川左三郎

碓 若 勸 扇

碓 若 勸 柳

碓 若 勸 惠美

碓 若 勸 以知

碓 若 勸 康

森田江津

山本力ネ子

富永栄子

田中嘉子

白坂栄子

宇佐見あや子

高橋照子

一、大和楽

団十郎娘

邦枝完二 作詞
宮川寿朗 作曲

娘 碓 若 扇 史郎

丁雅 逸 見 律 子

一、義太夫

蝶の道行

小横 碓 若 勸 澄

助国 碓 若 勸 二 一郎

● 第二部

一、長唄 藤娘

榎若勸康

一、長唄 近江のお兼
(晒女)

榎若幸扇

若い者 尾上扇五郎
中村又雄

一、長唄 助六

榎若新之助

若い者 市川左三郎

一、清元 文売り

榎若勸扇

一、長唄 連獅子

狂言師右近後に
親獅子の精

榎若勸二郎

狂言師左近後に
仔獅子の精

榎若勸柳

胡蝶 高橋美登利

胡蝶 高橋由佳理

一、長唄 都風流

久保田万太郎 作
吉住慈恭 / 稀音家浄観 作曲

榎若勸恵美

一、長唄 大原女

榎若勸以知

一、長唄 四季の山姥

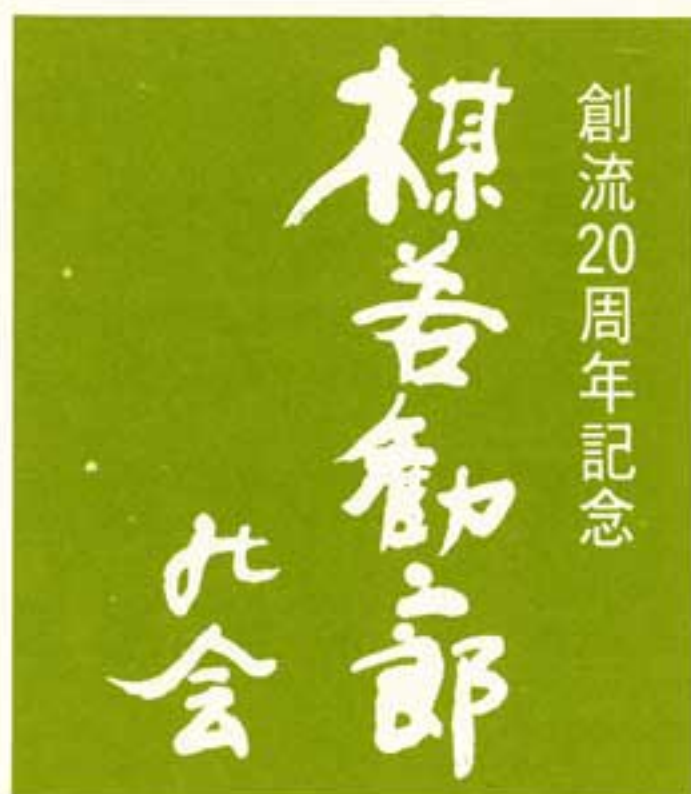
榎若勸喜代

榎若流二十十年の歩み

榎若勸二郎主催公演掲載

- 昭和39年12月6日 於小岩公会堂
第1回 榎 の 会
- 昭和41年10月16日 於市川市民会館
創流 披露 舞踊 会
(第2回 榎の会)
- 昭和42年10月13日 於市川市民会館
創流5周年記念舞踊会
- 昭和43年10月13日 於船橋大劇場
第1回 榎 若 会
- 昭和44年6月21日 於すみだ劇場
第4回 榎 の 会
- 昭和45年3月22日於サンケイホール
第2回 榎 若 会
- 昭和45年9月27日 於明治座
創流七周年記念舞踊会
(第3回 榎若会)
- 昭和46年10月9日 於江戸川公会堂
第5回 榎 の 会
- 昭和47年2月20日於朝日生命ホール
第4回 榎 若 会
- 昭和48年 6月29日 於明治座
6月30日
創流10周年記念舞踊会
(第5回 榎若会)
- 昭和49年3月28日 於明治座
榎若勸二郎・勸助リサイタル
- 昭和49年10月29日 於明治座
昭和49年度文化庁芸術祭参加
榎若勸二郎特別舞踊公演
- 昭和49年10月29日 於明治座
第6回 榎 の 会
- 昭和50年1月25日於朝日生命ホール
榎若勸二郎・勸助リサイタル
- 昭和50年6月28日 於明治座
榎若勸二郎・勸助リサイタル

—榎若勸二郎夏を踊る会—



昭和56年

7月25日(土) **ABCホール**

開演5時30分・入場料5,000円

- 昭和50年11月5日 於東横劇場
昭和50年度文化庁芸術祭参加
戸部銀作 監修
榎若勸二郎の会
- 昭和51年9月12日 於日経ホール
榎若勸二郎の会
(素踊り会)
- 昭和51年11月2日 於東横劇場
昭和51年度文化庁芸術祭参加
郡司正勝 監修
榎若勸二郎の会
- 昭和52年 2月26日 於歌舞伎座
2月27日
戸部銀作 監修
創流15周年記念舞踊会
(第六回 榎若会)
- 昭和52年5月1日 於ABCホール
榎若勸二郎の会
- 昭和52年10月28日 於明治座
奈良東大寺勸進舞踊公演
榎若勸二郎の会
- 昭和53年10月31日 於国立劇場
浅草観音示現千三百五十年に因んで
榎若勸二郎の会
- 昭和54年6月3日 於ABCホール
榎若勸二郎の会
- 昭和54年10月22日 於浅草公会堂
昭和54年度文化庁芸術祭参加
郡司正勝 監修
榎若勸二郎の会
- 昭和55年4月23日 於国立大劇場
第10回記念リサイタル
榎若勸二郎の会
- 昭和55年11月5日 於東横劇場
昭和55年度文化庁芸術祭参加
郡司正勝 監修
榎若勸二郎の会
- 昭和56年5月23日 於国立大劇場
創流20周年記念舞踊会
(第七回 榎若会)
- 昭和56年7月25日 於ABCホール
榎若勸二郎夏を踊る
榎若勸二郎の会
- 昭和56年10月28日 於明治座
榎若勸二郎特別舞踊公演

榎若勸二郎特別舞踊公演



昭和56年

10月28日(水) 浜町明治座

開演6時・入場料8,000円

■地方連名

●長唄

唄松島 庄三郎
松島 庄一
松島 英三郎

杵屋六里太郎
稀音家 義丸
芳村 伊知蔵

和歌山富之助

三味線

杵屋 弥一郎
杵屋 弥助
杵屋 弥二郎
杵屋 五平
杵屋 藤太郎

柏 要二郎
柏 伊三雄

●清元

浄るり

清元登志寿太夫

清元政栄太夫
清元梅喜太夫
清元成美太夫
清元三枝太夫
清元小成太夫

三味線

清元梅 吉

清元 吉寿朗

清元 吉志郎

清元 静二郎

●義太夫

浄るり

竹本 米太夫
竹本 峰太夫
竹本 喜太夫

三味線

野澤市造
豊澤孝二郎
鶴澤寿次郎

●大和楽

唄

大和 美世葵

大和 礼子
大和 郁子
大和 美花

三味線

大和 久満
大和 秀
大和 君子
大和 芳枝

●鳴物

堅田 喜三久

福原 百之助
望月 左吉
藤舎 華鳳
中井 一夫
仙波 朋兼
望月 左太郎
望月 喜美
望月 英人
大原 信正

望月 鏡子

鳳声 晴由

■スタッフ

大道具 日本総合舞台美術

照明 国立劇場照明部

小道具 松竹小道具

小道具 東邦美術

衣裳市川衣裳

かつら 寿々々喜

床山中 山

顔師原 多美江

後見風間清介

後見高橋敏広

つけ打杉浦実

狂言方竹柴太郎

進行阿部幸男

印刷みその印刷

総務 榎若事務所

振付 榎若 勸二郎

後援 巴屋後援会

主催 榎若 流

家元 榎若 勸二郎

榎若 勸助

東京都江戸川区南小岩8-9-3
TEL 03-672-8825

